ICM-90　特集号

第21回国際数学者会議について

小　松　彦三郎

第21回国際数学者会議(International Congress of Mathematicians 1990)は，1990年8月21日から29日まで，国立京都国際会館に76ヵ国より3955人(日本人2329人，外国人1626人)の正参加者と562人(大人470人，子供92人)の同伴参加者が実際に集り，盛大に開催された．これはICMの史上最大の参加者数である．計画より500人も多かったにもかかわらず，大した混乱もなく，無事終了できたのは，準備，運営に携わった方々及び参加者のご協力の賜物である．責任者として厚くお礼申し上げる．

会議の公式記録は，1991年1月の決算後に発表される和文報告書及び1991年中に出版予定の英文Proceedingsとして公表される．短い報告は会報70号にも書いた．ここでは，なるべくこれらの報告と重複を避けて，この会議がどのように準備されたか書くことにしよう．

1. ICM 90検討委員会以前(1966年8月—1981年5月)

私の知るかぎり，国際数学者会議(ICM)を日本で開こうという最初の提案は，1966年モスクワでのICMの直前に開かれた国際数学連合(IMU)の総会でなされた．しかし，このときは次のICM 70はニースで開催されることになり，日本の提案は受入れられなかった．代って，吉田耕作教授が1967年以後のIMU理事に選ばれ，以後IMUが後援する地域会議(Regional Conference)などで日本が大規模な国際会議を主催する経験を積んでゆくようすすめられたと聞いている．

日本主催の第1回の地域会議は1969年4月1日から8日まで東京で開催された．主題は‘函数解析学とその周辺’で，20ヵ国から334人(日本人291人，外国人43人)が集った．規模からいえばICMの10分の1であるが，学問的にはこの分野の会議としてICMに優るとも劣らぬ充実した会議であったように思う．1971年以後IMU理事は河田敬義教授に代り，第2回の地域会議は‘多様体論’を主題として1973年4月10日から17日まで東京で開催された．13ヵ国から436人(日本人396人，外国人40人)が参加した．

本来のもくろみならば，2回の経験を経てこの次はICMを招致する順序であったと思うが，そうはならず，IMU後援の地域会議も2回以後は続かなくなってしまった．理由はいろいろあるであろうが，募金の困難と，大規模な国際会議につきものの政治的な煩わしさではなかったろうかと忖度する．函数解析学国際会議では約1500万円，多様体論国際会議では約2400万円を募金したと記録にある．また，この時期は冷戦が事実上熱戦であった時代で，共産圏諸国からの入国が著しく困難であった上，国際的には国交のない国からの入国も認めよという強い圧力があり，双方の板挟みとなった組織委員長のご苦労は想像以上のものがあった．

次にICM開催が話題となったのは1979年である．たまたま，訪日中のChandrasekharan教授に服部晶夫教授がICMを招致するにはどうすればよいか質問したのがきっかけになって，IMU側，日本側とも，近い将来日本でICMを開催することを真面目に検討することになった．Chandrasekharan教授は，5期20年間IMU理事会のメンバーで，幹事と会長を1期ずつ務めたIMUのぬしともいえる人物である．

日本側では，当時数学研究連絡委員会の委員長をしておられた伊藤清教授が，研連の中にワーキング・グループを作り，1986年に日本でICMを開催する可能性の検討を始められた．メンバーは伊藤清，永田雅宜，溝畑茂，服部晶夫，河田敬義，木村俊房の諸氏であった．国立京都国際会館を使う京都案，虎の門ホールと上智大学を使う東京案及び北海道大学を使う札幌案の三案を作り，日本数学会での説明会や全国の数学教室へのアンケートを実施，1981年1月には予算も含めて成案を得た．しかし準備不足を理由にIMUに立候補することはとりやめた．

会報51号に掲載された報告によると，京都または東京での開催の場合，総経費は1億5千万円と見積られている．1人2万円の参加費を3千人から集め，日本学術会議及び日本数学会に各々千万円負担してもらうとして，7千万円を募金で賄う必要があったが，誰にもこれだけの額を募金できる自信がなかったようである．但し，ICM 90をめざしてワーキング・グループは存続させた．

2. ICM 90検討委員会(1984年5月—1985年1月)

今回のICM開催について，口火を切られたのは再び伊藤清研連委員長である．1984年2月13日付で木村俊房日本数学会理事長に書簡を送り，共同して1990年のICMの日本開催を検討したいと申し出された．この結果，1984年4月3日の日本数学会評議員会と理事会でICM 90検討委員会(Feasibility Committee on ICM-90)を設置することが決定された．伊藤清教授が委員長となり，委員には，数研連の中のワーキング・グループのメンバーであった池田信行，伊藤清，河田敬義，木村俊房，小松彦三郎，田村一郎，永田雅宜，広中平祐，溝畑茂，村上信吾の10氏に，荒木不二洋，藤田宏，松村睦豪の3氏が加わった．

ICM 90検討委員会は1984年5月21日，7月1日，7月17日，9月29日，11月16日及び1985年1月19日の計6回の会合を開き，日本で開催する場合の開催場所，時期等について検討した．河田敬義教授がまとめられた前回の案をもとに，京都案，ホテルニューオータニと上智大学の東京案及び筑波大学の筑波案の3案を比較検討した．宿泊施設の容量から筑波は無理であることがわかった．京都と東京の比較では，会場費が割高ながら一つの場所で全行事が行える利点とホテルが安いことを考え，京都をとった．開催時期については，1983年よりIMU理事となられた溝畑教授を通じてIMU理事の意見もきき，種々検討したが，最終的には世界中の数学者が集まれる時期は8月中を除いてはないことがわかり，送り火の後の9日間とした．

溝畑教授の活躍でこの期のIMU理事会はICM 90の日本開催に当初より好意的であったが，一方，1990年はババリア数学会の創立100周年にあたり，西ドイツがミュンヘンでの開催を申出ていた．西ドイツは，ワルシャワでのICMが開催不可能なときはハンブルグで肩代りすることを約束していたこともあり，きわめて有力な候補であった．IMU理事会が次期のICM開催地の候補を決めるSite CommitteeはICM開催年の春に開かれることが多いが，それまで待てばどちらに転ぶかわからないというのが，IMU幹事Lehto教授の判断で，1985年5月の理事会には日本開催

の具体案を出すよう溝畑教授に薦められた．

ICM 90 検討委員会はこれに応ずることにしたが，案を提出することは正式に立候補することであり，数研連及び日本数学会の総意を確認しなければならない．また，対応した体制を作る必要があった．ICM 検討委員会の後半はこのための審議に費やされた．そこで得られた結論は，上の案を作ることを目的として ICM 90 準備委員会を発足させる．委員長は伊藤教授が務め，委員には検討委員会の委員に，服部晶夫，飯高茂，戸田宏，渡辺信三，島田信夫，柏原正樹，佐武一郎，小田忠雄，飛田武幸の各氏を加える．荒木不二洋氏と小松彦三郎が幹事となり，当面，戸田宏と飯高茂の両氏を加えて幹事会を構成し実際の立案を行うというものであった．4年前とちがって ICM 開催の実務を担ってもよいという人が割合簡単にきまったのは，1億円程度の募金は難しくないという意見に従ったからである．

3. ICM 90 準備委員会(1985年2月—1986年10月)

ICM 90 検討委員会の案は 1985 年 2 月 2 日に開かれた日本数学会の評議員会と理事会で承認され，日本数学会の中におかれた委員会として，ICM 90 準備委員会(Japan Committee for ICM 90)が発足した．1985 年 2 月 16 日に第 1 回の会合が開かれ，幹事会の案をもとに IMU 理事会に提出する 'Proposal for ICM 90 in Kyoto' を審議，決定した．事実上，荒木氏が一人で作成したこの提案は 40 ページにわたる詳細なもので，今回の ICM は，組織と予算を除き，このとき殆どすべて決定されたといってよい．

溝畑教授が持って行かれたこの案は幸い IMU 理事全員に受け入れられ，1985 年 5 月 9 日には Site Committee が開催され，ICM 90 の京都開催を IMU 総会に提案することが決定された．

ICM 90 準備委員会は，その後 1985 年 6 月 1 日，7 月 22 日，10 月 26 日，1986 年 3 月 1 日及び 10 月 18 日の計 5 回開かれ，ICM 90 開催へむけて組織づくりと予算案作成を行った．予算と募金は別項にゆずり，主として組織について述べよう．まず第 2 回の会合で準備委員会の委員を増やすことを決め，北大，東工大，都立大，早大，慶大，上智大，京都産大，奈良女大，阪市大，神大，広大，九大から 1 人ずつ加わってもらった．第 3 回の会合では委員長が小平邦彦教授に代わること及び学術会議新会員上野正氏が委員に加わることが決められた．また，会場，行事，宿泊・輸送，登録・事務，印刷・通信，渉外の小委員会が設けられ，立案と予算見積りを行った．最後の会合では，募金委員会，財務委員会及び学術委員会の設置も決った．

一方，日本学術会議に共催を申請することを決定し，その準備として 1985 年 12 月 21 日付で '国際数学者会議の日本開催について' という文書を作成，学術会議会員等関係者に配布した．

1986 年 8 月 1 日オークランドで開かれた IMU 総会で ICM 90 の京都開催が正式に決定された．この席上，幹事会が作成したスケジュール案，京都の説明，ホテルのリスト等を各国代表に配布し，既に準備が完了していると評された．実際，上記 2 文書のスケジュール案は総会開催地が奈良であったこと，バンケットが 8 月 24 日(金)の夜にあったこと，午前の全体講演の間の間隔が 15 分で，代りに午後のお茶の時間が 15 分長かったこと等を除けば，実行案と同じである．今回の ICM の準備が比較的順調に進んだのは，早くから案が固まっていたことが大きい．

バークレーでの ICM 86 の会期中に，荒木氏と小松はこの ICM の実質上の責任者であった J. P. Mesirov さんと H. Hope Daly さんに会っていろいろ話を聞いた．後で，アメリカからは ICM 86

の全資料を送っていただき非常に役立った．

因みに，1985年12月21日現在の委員は次の通りであった．委員長 小平邦彦(東大名誉教授)，幹事 荒木不二洋(京大数理研)，小松彦三郎(東大理)，委員 土井公二(北大理)，小田忠雄，佐武一郎(以上東北大理)，松村睦豪(筑波大数)，木村俊房，田村一郎，服部晶夫，藤田宏(以上東大理)，上野正(東大教養)，福田拓生(東工大理)，荻上紘一(都立大理)，河田敬義，高橋礼司(以上上智大理工)，伊藤雄二(慶大理工)，垣田高夫(早大理工)，飯高茂(学習院大理)，森川寿，飛田武幸(以上名大理)，伊藤清(京大名誉教授)，戸田宏，永田雅宜，溝畑茂，渡辺信三(以上京大理)，柏原正樹，島田信夫，広中平祐(以上京大数理研)，藤井宏，水原亮(以上京都産大理)，池田信行，村上信吾(以上阪大理)，荒木捷朗(阪市大理)，坂本礼子(奈良女大理)，西尾真喜子(神戸大理)，岡本清郷(広島大理)，工藤昭夫(九大理)．

この頃，京大数理研国際交流室に事務室を開設し，川崎一喜さんに事務を担当してもらった．

4. ICM 90 運営委員会(1986年12月—1989年8月)

大きな会議を開催するには組織委員会を作らなければならない．ところが，学術会議が共催する場合は内規があり，開催前年の夏，閣議の了解も得て共催が正式に決定した後，学会側と合意書をとりかわしてようやく組織委員会ができる．それまでは学会側で運営委員会を作って準備することになっている．

これに従い，日本数学会は1986年9月27日の評議員会及び10月25日の理事会でICM 90準備委員会をICM 90運営委員会(Committee of ICM-90)に改組することを決定，同じメンバー38人の構成で1986年12月6日に第1回会合を開いた．但し，上のリストの土井，高橋，垣田の3氏はそれぞれ岡部靖憲，森本光生，草間時武の3氏に交代している．

この会合ではICM 90運営委員会規則を確認し，次の通り運営委員会役員と運営委員会の下におかれる諸委員会を決定した：

会長 小平邦彦，副会長 伊藤清，広中平祐，委員長 小松彦三郎，幹事 荒木不二洋，会計 戸田宏，幹事会委員(以上の他)飯高茂，永田雅宜，溝畑茂

財務委員会 委員長 田村一郎，委員 池田信行，戸田宏，飛田武幸

募金委員会 未定

学術委員会 委員長 溝畑茂，委員 佐武一郎，小田忠雄，広中平祐，落合卓四郎(東大理)，松本幸夫(東大理)，岡本清郷，柏原正樹，藤田宏，渡辺信三，小松彦三郎，荒木不二洋

実行委員会 委員長 永田雅宜，委員 荒木不二洋，戸田宏

会場委員会 委員長 戸田宏，委員 藤井宏，河野明(京大理)

行事委員会 委員長 柏原正樹，委員 丸山正樹(京大理)

宿泊・輸送委員会 委員長 渡辺信三，委員 斎藤恭司(京大数理研)

登録・事務委員会 委員長 島田信夫，委員 三輪哲二(京大数理研)，上野健爾(京大理)

印刷・通信委員会 委員 山崎泰郎(京大数理研)，河合隆裕(京大数理研)

出版委員会 未定

渉外委員会 委員長 村上信吾，委員 高橋礼司(上智大理工)

広報委員会 委員長 飯高茂，委員 森本光生．

これによってICM 90のための陣容はほぼ整った．また，この日の審議に基づき，1986年12月15日付で学術会議会長宛共催依頼文書‘第11回国際数学連合総会および第21回国際数学者会議の日本開催について(連絡)’が作られ，日本数学会理事長名で提出された．

ところで，これまでは数研連と数学会のみが関わっていたICMの準備であったが，ICMは純粋数学から応用数学の全領域，そして数学教育におよぶ全数学の会である．十全な準備をするため他の関連学会にも主催者に加わっていただくべきということになり，日本数学会理事長小松より1986年10月23日付で，日本数学教育学会，日本ソフトウェア科学会，情報処理学会，日本統計学会及び日本オペレーションズ・リサーチ学会に，少し遅れて日本科学史学会及び日本アクチュアリー会に共催または後援の依頼をした．結果は，情報処理学会から後援の返事を頂いた他はすべて共催して頂けることになった．そして，1987年11月までに次の方々が各学会代表としてそれぞれICM 90運営委員会と学術委員会に加わられた．

日本数学教育学会：松尾吉知(会長)，松尾吉知(東京理大理)；日本オペレーションズ・リサーチ学会：竹内啓(副会長)，茨木俊秀(京大工)；日本科学史学会：黒田孝郎(会長)，村田全(立教大理)；日本ソフトウェア科学会：米田信夫(理事長)，野崎昭弘(ICU)；日本統計学会：赤池弘次(代表)，清水良一(統数研)；日本アクチュアリー会：二見隆(理事長)．

ICMのもう一つの主催者はIMUである．前回のバークレーのICM以来，ICMの学術プログラムはIMUが選任するプログラム委員会に決定権があり，主催国は自国から若干の招待講演者を追加できる権限を持つだけとされている．IMU理事会は1987年5月23日次のプログラム委員を選任した：委員長N. H. Kuiper(IHES)，委員V. I. Arnold(Moskva大)，Alain Connes(Collège de France)，R. L. Graham(Bell研)，広中平祐(京大数理研)，柏原正樹(京大数理研)，R. P. Langlands(Princeton高等研)，溝畑茂(京大理)，D. G. Quillen(Oxford大)．

フィールズ賞及びネヴァンリンナ賞もIMUが選任する委員会が選考決定する．時間的に前後するがIMU理事会は1988年4月15日次の委員を選任した：Fields Medals Committee：委員長L. D. Faddeev(IMU会長)，委員M. F. Atiyah(Oxford大)，J. M. Bismut(Paris南大)，E. Bombieri(Princeton高等研)，C. Fefferman(Princeton大)，岩沢健吉(Princeton大名誉教授)，P. D. Lax(Courant研)，I. Shafarevich(Steklov研)，他1名(後に辞退)．Nevanlinna Prize Committee：委員長L. Lovász(Budapest大)，委員A. Chorin(California大Berkeley校)，M. Rabin(Hebrew大)，V. Strassen(Konstanz大)．

以上の委員名はICM開会式で公表されるまで秘密とされた．

さて，第2回のICM 90運営委員会は1987年11月14日に開かれた．岡部，西尾委員がそれぞれ鈴木治夫氏と細川藤次氏に交替し，前回未定であった委員会が次のように定まった：

募金委員会 委員長 伊藤清，副委員長 木村俊房，委員 荒木不二洋，飯高茂，伊原康隆(東大理)，落合卓四郎(東大理)，小松彦三郎，斎藤正彦(東大教養)，中岡稔(阪大理)，永田雅宜，服部晶夫，飛田武幸，藤田宏，村上信吾，村上温夫(神戸大工)，森本光生

出版委員会 委員長 佐武一郎，小田忠雄(東北大理)．

なお，学術委員会に伊理正夫(東大工)氏を追加，学術会議の内規に合わせ，運営委員会の下の幹事会を実行委員会と改称し，それに合わせて実行委員会を地区委員会と名を改めた．また，この委員会の決定であるIMU総会開催地を神戸に移すこと及び中岡稔(阪大理)，細川藤次，村上温夫

(神戸大工)の3氏を委員に加えたことを追認した.

更に，この会合では，予算及びICM 90の概要を定めた'ICM 90説明書'を決定，ICM 90の準備体制をすべて整えた．この説明書は1987年12月付で印刷，公表した.

これに基づき，1987年12月12日伊藤清三日本数学会理事長は，永田雅宜数研連委員長の副申を添え，近藤次郎日本学術会議会長宛に，他の6学会と共に共同主催されるよう正式に申請した．日本学術会議は毎年4つばかりの国際会議を共同主催する．そうなれば，1000万円程度の国費が支出される他，国立大学からの参加者のため文部省から旅費が追加配分されるなどの援助がある．このための申請である．1988年3月14日学術会議でヒアリングがあった．幸い合格となり，1988年4月1日内定の通知があった.

運営委員会はその後1988年4月3日，1989年4月4日及び8月14日に開かれ，学術会議と共催のための合意書等が審議された．この間渉外委員長が服部晶夫氏に交替するなどかなりの委員の新任，交替があったが，詳細は省略する．現在の委員名簿は2nd Announcementにあり，報告書とProceedingsにも掲載される．なお，幹事会ないしは実行委員会はほぼ毎月開かれた.

5. 予算と募金

ICM 90の総括予算案が最初にまとめられたのは，1985年10月の第4回準備委員会の討議資料として荒木氏が準備された案である．支出総計4億3500万円は河田案の約3倍で，委員たちの度胆を抜いた．一番反発があったのは外国人の旅費・滞在費5415万円とソーシャルプログラム費の7940万円であった．私もそのときは同じ感想を持ったが，実際その後私達の努力したことは，いろいろな制約の中，この二つの項目の金額をできるだけ増やすこと，そして最終的にはこの金額以上にすることであったから，このショック療法はICM 90の成功のため大いに役立ったと評価すべきである．荒木氏の言い訳は募金をする人に決心してもらうため多めに見積ったということであったが，この目的のためには逆効果になったかもしれない．実際は，その他の経費を大幅に減少させることができたのであるが，それには，今回のICMがいわゆる会議屋さんの世話にならなかったことが大きく寄与している．実際の業務を負担された方々の努力に感謝したい.

この後の予算編成は，支出については，主に荒木氏が業者から集めた見積りを会場以下の小委員会が検討，取捨選択した結果を戸田氏が集計，幹事会にかけるという手順で進んだ．これが準備委員会の間続き，1986年12月の第1回の運営委員会には総額2億5000万円の予算案として提出された．当然と言えば当然ながら，小委員会の議を経た部分は，決算とも殆ど差異がない．これがすべての基礎となった.

一方，収入の主なものは参加費と寄付金であるが，企業が免税で寄付できるには，大蔵省から指定寄付金の告示を受けなければならない．この指定寄付金の総額は，参加費の総額から会食費，バス代など非学術プログラムの経費を差し引いたものを超えられない．また，最近まで，外国からの参加者の旅費，滞在費を指定寄付金で援助することは許されていなかった．このため1人当りの参加費は3万円とする他なく，寄付金は税引き後の寄付を含めても総計1億円余が限度と見積られた．外国人旅費援助は必要最小限の1500万円とし，これ以上は財団の援助を期待した.

予算の審議は尚1年幹事会で続けられ，1987年11月の第2回運営委員会で決定され，総額3億840万円である．不足の財源は主に数学会会員の特別寄付に頼ることになった．この間1987年8

月6日と9月7日には大蔵省で項目毎の審査を受け，指定寄付金1億200万円の内示を受けた．

数学会員特別寄付金の募集は飯高氏が担当した．1138人の人達が4419万円余ご寄付下さった．

他の募金は最初永田研連委員長がやっていいと申出て下さっていたが，学術会議代表の組織委員は募金を担当できないという学術会議の内規のため，永田氏は実行委員会にまわり，結局は，小平会長の友人の財界人を煩わすことになった．東京商工会議所会頭の石川六郎氏，元大蔵事務次官谷村裕氏と協栄生命会長亀徳正之氏は財界の主だった人41人からなる国際数学者会議募金世話人会を組織し，募金を呼びかけて下さった．殊に，谷村氏と亀徳氏は数学者との相談あるいは業界団体や会社訪問のため凡そ40回も多忙な時間をさいて下さった．

1988年11月‘第21回国際数学者会議募金趣意書’を作成，実際の募金活動に入った．1989年7月21日には指定寄付金の告示があった．生命保険協会から3000万円，日本建設業団体連合会から700万円，電機・コンピューター業界から合計約4000万円など破格の寄付をいただいたおかげで募金は順調に進み，最終的には次の数理科学振興会ICM 90助成事業に対する寄付と合わせて1億4855万円の寄付をいただいた．

外国人参加者旅費援助のための財団の支援については，1989年6月になってもなお東南アジア生命保険振興センターと鹿島学術振興財団から計700万円の援助をお約束いただけたにすぎなかったが，その後，数理科学振興会から約3000万円の予算でICM 90助成事業を行うことができるというお申出をいただいた．このために1989年9月‘募金趣意書補遺’を作り，新に募金活動を始めた．更に，日本万国博覧会記念協会からも400万円の援助のお約束があり，結局6180万円余を計269人の外国人の旅費，滞在費の援助にあてることができた．

6. ICM 90組織委員会(1989年8月—1991年1月)

日本学術会議の共同主催は1989年6月20日の閣議で了解され，6月30日付で学術会議より7学会に共同主催するとの正式の通知があった．これに基づき，日本学術会議会長 近藤次郎，(社)日本数学会理事長 服部晶夫，(社)日本数学教育学会会長 茂木勇，(社)日本オペレーションズ・リサーチ学会会長 森村英典，日本科学史学会会長 山崎俊雄，日本ソフトウェア科学会理事長 米田信夫，日本統計学会会長 赤池弘次及び(社)日本アクチュアリー会理事長 内藤脩治の8氏は1989年8月4日付で‘第11回国際数学連合総会及び第21回国際数学者会議開催の為の準備・運営に関する合意書’を取交わし，第11回国際数学連合総会及び第21回国際数学者会議組織委員会(Organizing Committee of the International Congress of Mathematicians 1990)を発足させた．

赤池弘次，上野正，竹内啓，中嶋貞雄，永田雅宜，藤田宏(以上学術会議会員)，伊藤清三，池田信行，小松彦三郎，佐武一郎，松尾吉知，溝畑茂，森川寿，山口昌哉(以上数研連)，荒木不二洋(物研連)の諸氏が学術会議を代表する委員となり，服部晶夫(数学会理事長)，茂木勇(数学教育学会会長)，山崎俊雄(科学史学会会長)，米田信夫(ソフトウェア科学会理事長)，内藤脩治(アクチュアリー会理事長)，伊藤清，飯高茂，小田忠雄，落合卓四郎，木村俊房，小平邦彦，田村一郎，戸田宏，広中平祐，村上信吾(以上数学会)の諸氏が学会を代表する委員となった．また，彌永昌吉，(故)吉田耕作(以上学士院会員)，南雲道夫(阪大名誉教授)，川井三郎，山内正憲(以上アクチュアリー会元会長)の諸先生に顧問をおひきうけいただいた．

第1回の組織委員会は1989年8月14日第5回運営委員会の直後に開かれ，役員を決定，部会

を設置した．部会は運営委員会の下の委員会に相当する．募金委員会を除き，運営委員で組織委員会に加わらなかった人々を主なメンバーとする総務部会を新設した以外は運営委員会と同じである．

委員長 小平邦彦，副委員長 伊藤清，小松彦三郎，総務幹事 荒木不二洋，幹事(会計担当)戸田宏，幹事 広中平祐，飯高茂，永田雅宜，溝畑茂，服部晶夫の10氏に，総務部会長 藤田宏，財務部会長 田村一郎及び出版部会長 佐武一郎の3氏が加わって幹事会を構成することになった．この他の委員名簿は2nd Announcement，報告書及びProceedingsにあるので省略する．

第2回以後の組織委員会は運営委員会と合同で行われ，1989年9月30日と1990年3月30日に開かれた．毎回予算が改定されたが，外国人の旅費援助に関する部分が主で，他は大差ない．この間，文部省，京都府，京都市及び京都大学から後援を受けることが決まった．

最終の組織委員会，運営委員会合同会議は1991年1月19日に開かれ，決算を承認後，解散の予定である．1990年11月現在決算はまだ終っていないが，3500万円程度剰余金ができる見込みである．参加費が1500万円超過した一方，エクスカーションの補助金が申込が少なかったため1000万円剰り，また会議事務請負業者を使えば支払わなければならなかった1000万円がそのまま残ったことによる．外貨事情が悪い国々からの参加者は事前に送金できなかったため参加費を1万円多く払った上，エクスカーションの補助もなかった．剰余金はこれらの国々に還流するよう処分したいと考えている．

南アフリカ人入国問題(数学41(1989), 94-95)など政治的問題もなかったわけではないが，世界の和解に助けられて殆どは消えてしまった．日本の経済と円ドル交換率も我々に味方してくれた．

開会式で述べたように，私はICMを，数学を統一ある形で継承発展させてゆくためのお祭りと理解しているが，そのための計画をほぼ100%達成できて幸せである．

(こまつ ひこさぶろう・東京大学理学部)

ICM-90を振返って

荒 木 不二洋

第11回国際数学連合総会および第21回国際数学者会議は，それぞれ8月18日～19日神戸国際会議場および8月21日～29日国立京都国際会館において開催され，盛会裏に終った．編集部の御依頼によれば，小松彦三郎会議会長が総括記事を書かれるとのことで，以下いくつかの想い出を記することにする．なお，総会，募金，ビザに関係した渉外等については，より関係が深い小松会長が，また広報，数学会員からの募金については飯高茂広報部長がそれぞれ書かれると思われるので触れないことにする．

1. 招致

国際数学者会議(ICM)日本開催についての検討は1983年頃からはじめられたが，1984年にICM 90検討委員会が日本数学会に正式に設けられ，同年5月21日の第1回会合から著者もその